

植民地統治構造におけるキリスト教と その越境性に関する一考察

－1910年代の台湾 YMCA と K. W. ダウイを中心に－

高井ヘラー由紀

はじめに

異なる国家的・文化的・民族的アイデンティティを有するキリスト教徒たちは、植民地という文脈においてどのように出会い、その差異にかかわらず協同の活動に従事し得たのだろうか。本稿は、1910年代の台湾 YMCA を舞台とするカナダ人宣教師、漢族系台湾人キリスト教徒（以下、台湾人信徒）、日本人キリスト教徒（以下、日本人信徒）の三者間における協同体制の形成への試みとその限界について、キリスト教の「越境性」に関する考察を交えつつ検討しようとするものである。

筆者はこれまで主に、植民地期台湾における台日信徒二者間の関係に着目した論考を、異文化交流というアプローチからまとめてきた。¹ 異民族支配における文化接触および摩擦という観点から両者間の関係性を鑑みると、1910年代台湾 YMCA のケースは、日本人による台湾人に対する「力の差異」の押し付けとそれに対する台湾人側の拒絶という側面に加え、² キリスト教による台湾の文明化（＝近代化）を自らの使命であると信じる日本人の台湾人に対する合同／合併志向に対して、台湾人側も自らの権益を求めて「主体的」に日本人との関係構築を追求

-
- 1 高井ヘラー由紀『日本統治下台湾における日本人プロテスタント教会史研究（1895-1945）』（国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士論文、2003年6月）；同「日本統治下台湾のキリスト教界における異文化交流－台湾 YMCA の事例を中心に－」飛田良文ほか編『アジアにおける異文化交流』（明治書院、2004年3月）；同「植民地支配、キリスト教、そして異文化交流－日本軍による台湾武力制圧における事例より（一八九五年）－」『日本研究』30（2005年3月）を参照。
 - 2 前田成文は「差異の文化論」石井米雄編『差異の事件誌－植民地時代の異文化認識の相克－』（敵南堂書店、1984年）において、異民族支配における文化の接触及び摩擦には「力の差異が影のようにつきまとい」おり、「どちらの認識枠組みを採用するか、どちらが自己のアイデンティティを貫き通すか、どちらの言語で話をするか、どちらのエチケットに従うか」の選択により、「認識論的・意味論的レベルにおいて力の差異を押しつけ合うゲームの勝敗をあからさまにする」側面があることを指摘している（15）。

するという、両方の側面があったという方法で説明することができた。³ 本稿ではこのような「支配民族－被支配民族」間の「交流 (encounter)」あるいは「関係構築」というアプローチに対して、台日信徒間の仲介者としての欧米宣教師の存在に着目し、1910年代の台北において、カナダ長老教会ミッション (Canadian Presbyterian Mission、以下 CPM) 宣教師 K. W. ダウイ (Kenneth W. Dowie) が、いかに、越境キリスト教運動ともいえる YMCA の台北における組織改革を通して、二者のみならず三者「協同」の事業を試み、にもかかわらずその実現が困難であったかを、キリスト教の有する「越境性」および「個性」という切り口から改めて検討する。

さらに本稿では、ダウイが最終的に CPM 宣教師を辞任する原因となった信仰理解の問題を取り上げ、その高い異文化適応能力と信仰理解の流動性との関連についても、文化的境界および宗教的境界を越えて行き来する動きという意味において、「越境」的現象の一側面として検討してみたい。

従来、「越境的宗教」(transnational religion) とは、特定の宗教の信奉者が国境などの地理的境界線を越えて行き来する動き－とりわけ「宣教活動」や「移民」－に伴う宗教的拡散の多層性を説明する上で用いられてきた概念であり、その研究も特に米国への移民集団を対象としたものを主流としてきた。⁴ 本稿では、日本人信徒、台湾人信徒、そして欧米宣教師の、台湾－日本内地－欧米間の地理的移動に伴うキリスト教運動の越境的 (trans-border) な動き、という従来の解釈に加えて、キリスト教あるいは YMCA 運動の理念そのものに内在する、政治的文化的民族的境界を越える普遍的性格、という意味においても、本概念を用いてみたい。

なお、英語の transnational/ism に対応する「越境」という邦語は、「国境」

3 高井ヘラー (2004)；植民地という政治的文化的抑圧における「主体」という視点については、山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化－人類学のパースペクティブ』(新曜社、1997年)を参考にした。なお、欧米においてはいわゆる「エージェンシー (agency)」に注目する研究が近年盛んになっており、その概念の有用性および問題性についても議論が重ねられている。Walter Johnson, "On Agency," *Journal of Social History* 37 (Fall 2003), 113-124参照。

4 代表的な研究に、Susanne Hoeber Rudolph and James Piscatori, ed. *Transnational Religion and Fading States* (Boulder, Colorado & Oxford, U.K.: Westview Press, 1997); Peggy Levitt, "Redefining the Boundaries of Belonging: The Institutional Character of Transnational Religious Life," *Sociology of Religion* 65:1(spring 2004), 1-18; 同 *God Needs No Passport: Immigrants and the Changing American Religious Landscape* (New York: New Press: Distributed by W.W. Norton & Company, 2007) などがある。Transnational Studies に関する概論については、Sanjeev Khagram and Peggy Levitt, ed. *The Transnational Studies Reader: Intersections and Innovations* (NY and London: Routledge, 2008) を参照。

にとどまらないさまざまな「境界」を「越える」(cross-border/trans-boundary) という意味を内包し、したがって両者において表現しうる現象の範囲は異なっているが、本稿では邦語において意味をなす限りにおいて「越境」という語を引き延ばして用いることとし、英語と厳密に対応させることはあえてしないものとする。

1 越境運動としての YMCA と台湾における展開

台湾における YMCA 活動の事例を取り上げるにあたり、まず YMCA の欧米における発祥とその越境的性格について確認しておきたい。

一般に YMCA 運動の始まりは、1844年6月6日、ジョージ・ウィリアムズ (George Williams) がロンドンにおいて呉服貿易会社の従業員ら有志10数名とともに、青年層の霊性改善を目的として立ち上げたことに遡る。⁵ 教会を介さない自発的かつ敬虔主義的なキリスト教青年運動自体は、16世紀以降、既にオランダ、フランス、北米、ドイツ、スコットランド、イングランド、スイスなどの各地において展開されており、共通の特色として、聖書研究会や祈祷会の開催、ミッシヨナリー・スピリット、信仰上の一致を求める傾向などを有していた。⁶ ロンドン YMCA の設立自体は、産業革命の影響により青年人口が地方から都市へ流入し、粗悪な労働環境の中、多くが不道德な娯楽に走るといった特定の状況に対する動きであったが、これを嚆矢として YMCA はまたたく間に西欧・北米・オーストラリアの各地において、しばしば既述の青年運動を吸収する形で設立され、早くも1855年には第一回の世界大会がパリにおいて開催されている。

以上の経緯にも示されているように、YMCA は第一に、単身かつ青年期の男性を世俗的「誘惑」から守り、キリスト教的に「健全」な道に導く目的で開始された運動であった。⁷ 第二に、特定の教派や教会組織に属さず、また特定の国や文化を中心にもたないという、二重の意味でのエキュメニカルな運動であった。この、YMCA のエキュメニカルな性格については、アンリ・デュナン (Henri Dunant) が、YMCA は「国籍・言語・教派・信条・階層・職業などを超えるエキュメニカル精神を広めなくてはならない」と述べており、それが YMCA の

5 YMCA 創設史については、Clarence Prouty Shedd and others, *History of the World's Alliance of Young Men's Christian Associations* (London: S.P.C.K., 1955), Part One を参照。

6 Auguste Senaud, "YMCA's Before the YMCA's," Shedd, 3-14.

7 たとえば1855年にパリで行われた第一回目の世界会議への招待文に、このような精神が典型的に見られる (Shedd, 110)。

公式見解でもあったと考えられる。⁸ 第三に、運動の対象である青年らが同時に運動の担い手であるという、青年主体のキリスト教運動であった。歴史の変動に敏感に反応し、新しい思想を容易に取り込み、理想に向かって行動する、既存の教会組織内にはおさまりきれない青年期のエネルギーが、信仰運動という形でYMCAにおいて発揮されたのである。この特色が世界各地におけるキリスト者青年層の共感を呼び、国境および教派の壁をいとも容易に越えて拡張していったといえる。

こうして、いわばその開始時から「越境」的性格を強く有していたYMCA運動は、世界各地における青年層の間で展開されることとなったが、中でももっとも目覚ましい発展を遂げたのは北米においてである。第二次信仰的覚醒運動(The Second Great Awakening)以降、大衆的な福音派(evangelical)教会が躍進した北米では、フィニー(Charles G. Finney)やムーディ(Dwight L. Moody)といった福音派伝道者らがYMCA運動にも加わっていた。福音派教会の正会員であることのみをYMCA会員の条件と定めた「ポートランド基準(Portland Basis)」の北米YMCAにおける採択(1869)、⁹またYMCAによる宣教師の海外派遣などを見ると、北米YMCAにおいては、エキュメニズムというよりは福音派キリスト教に典型的に見られた拡張主義(expansionism)が軸となっていたといえる。この背景には、世界のキリスト教化すなわち文明化が神の国の地上における実現であり、歴史はその方向に進んでいるという意味における「進歩主義」的(progressive)な信仰理解があり、YMCAを含む北米キリスト教界の海外宣教活動を促す強い動機となっていた。それに加えて19世紀末までには他国をしのぐ帝国勢力として浮上していたアメリカには、「キリスト教国家」

8 デュナンはまた、エキュメニカルであるとは、「異なる教派に属するキリスト教徒が、愛において一致し、互いに交わり、神の栄光のために共に慈善に従事しつつも、各々が自由を保ち、必要ならばその個人的見解および宗教的確信について弁護すること、しかし忍耐と憐れみをもってそうすること」という見解を示しており、これがYMCAおよび世界同盟における正式な見解となったという(Shedd, 738)。

9 Jun Xing, *Baptized in the Fire of Revolution: The American Social Gospel and the YMCA in China 1919-1937* (Bethlehem, PA: Lehigh University Press, 1996), 28-29; Shedd, 203. なお、1855年のパリ基準においては、「聖書が説くようにイエス・キリストを自らの神および救い主と認め、その信仰理解および生き方において彼の弟子となり、青年層における神の国の拡張に力を注ぐことを望む青年」というのが会員の条件であった。

そして「文明国家」としての揺るぎない自信が存在していた。¹⁰

北米における YMCA の進展はアジアにもインパクトを与え、1870年代以降、インド、中国、日本、朝鮮などの各地において現地キリスト者青年によって YMCA が設立された。日本では1880年に東京 YMCA が設立されたのを皮切りに、大阪で1882年、横浜で1884年、神戸で1886年と、次々に設立されている。台北において日本人キリスト教徒を中心とする台湾 YMCA が設立されたのは1898年1月であり、東京 YMCA 設立から18年後、日本による台湾割譲からわずか3年後であった。¹¹

台湾 YMCA が台湾植民地統治史の文脈において早期に設立された背景には、統治開始期に台湾へ渡航した民間日本人の多くが青年あるいは壮年期の单身男性であり、不慣れな異文化の環境において、飲酒・煙草・賭博・女色などの娯楽に流れるなど、ある種ロンドン YMCA 設立の背景とも類似した状況があった。このような中、日本人キリスト教徒は、少なくとも自己理解においては、「独り清節堅信を保たん」と孤軍奮闘していたのである。¹² 彼らは自身を「誘惑」から守る手立てを必要とすると同時に、植民地という文脈において本来「文明の使徒」たるべき統治者日本人が、低道徳かつ「野蛮」であることに対して相当の危機感を抱き、日本人「教化」の使命を痛感していた。¹³ この背後には日清戦争前後より、自身を「文明」、台湾を含む東アジア地域を「野蛮」と規定し、「文明による野蛮の教化」を使命とし、かつ国家主義に支えられた、日本人キリスト教徒特有の「進歩主義」的意識構造が存在していた。

この、「誘惑」の多い環境、「教化」への使命感に加え、統治初期には日本人キリスト教徒もそのほとんどが青年期および壮年期の单身男性によって構成され、既に超教派の信徒団を形成していたという要因は、YMCA の存在意義と合致するものであり、その開始を容易にしたと考えられる。こうして日本人青年キリス

10 Jon Davidann, *A World of Crisis and Progress: The American YMCA in Japan, 1890-1930* (Bethlehem, PA: Lehigh University Press, 1998), 19-20; Daniel H. Bays, "The Foreign Missionary Movement in the 19th and early 20th Centuries" (<http://nationalhumanitiescenter.org/tserve/nineteen/nkeyinfo/fmmovementc.htm>).

11 台湾 YMCA に関する先行研究としては、牧尾哲編『臺灣基督教傳道史』(1932年)；田村貴紀「台湾 YMCA 史」(1985年度研究所春期コース修了論文、1985年7月)がある。

12 また、女性の渡航者の多くは「水商売」従事者であった。台湾統治初期に渡航した日本人の職業分布については、高井ヘラー博士論文、78-80、を参照。このような現状を踏まえ、日本本国教会は早急に「健康的」且つ「高尚」な霊的娯楽を提供すべきであると主張したのが、当時のキリスト教機関誌『福音新報』に掲載された「台湾伝道事情の一斑(上)・(下)」(第65号、1896年9月25日；第66号、同年10月2日)などの一連の記事であった。

13 同上。

ト教徒有志の間で1897年より創立準備が行われた結果、1898年1月2日の「台湾基督教青年会」（以下、台湾 YMCA）発会となったのである。¹⁴

その後の概略をたどると、¹⁵ 創立当時の台湾 YMCA に会長はなかったが、1900年頃より台湾総督府土木局長であった長尾半平が会長に就任、1912年には高橋辰二郎が引き継ぎ、宗教部、講演部、社会部、庶務部に別れて活動、会員数は65、評議員8名であった。1913年には艋舺八甲庄一八六番戸に事務所が置かれ、会長・副会長・専任理事・理事5名および評議員12名が設けられている。1915年には夜学部を開設し、英語・台湾語・日本語を教授、社交倶楽部も設けられた。同年末、日本基督教会牧師の深津基一が初の専任主事として就任、¹⁶ それに伴い台北駅の裏手に位置する府中交街に借家をして仮会館とした。これは3階建ての建物で、1階を夜間語学学校および社会・宗教活動のために用い、2階を深津の住居とした。¹⁷ 会員数はこの年183まで増えている。

2 台湾キリスト教界における台日信徒間関係

ここで19世紀以来の台湾におけるプロテスタント宣教の歴史に目を向けると、1865年以来、台南を拠点とする英国長老教会ミッション（English Presbyterian Mission、以下 EPM）および淡水を拠点とするカナダ長老教会ミッション（CPM）が、それぞれ台湾南部および北部の医療、教育、福音伝道を三本柱とする宣教活動に従事しており、1895年前後までには現地教会数100以上、信徒数4,000以上にのぼっていた。当時の台湾キリスト教界は、この両ミッションの宣教師、そしてミッションの管轄下にある南北台湾長老教会の信徒および伝道者、すなわち長老派のみによって構成されていた。

台湾は漢族（閩南および客家系）、マライ・ポリネシア系先住民族、そして平埔族¹⁸ から構成される多民族多言語地域であるが、両長老教会ミッションによる宣教活動は漢族および平埔族を中心に開始され、日本統治期には総督府によって山地伝道が禁止されていたこともあり、先住民族への直接的な伝道はほとんど行われていなかった。本稿において言及する、台北在住の台湾人キリスト教青年層とは、おそらくそのほとんどが閩南語を日常的に用いる漢族だったと思われる。

14 田村、3；牧尾、123。

15 以下、牧尾、123-4。

16 高井ヘラー博士論文、204。

17 “Notes and News,” 『開拓者』第11巻第2号、1916年2月。

18 平地に居住し漢化或いは「教化」の度合いが進んでいる先住民族。

1895年以降は、日本による植民地統治により、台湾キリスト教界に日本人キリスト教会が加わることとなり、長老派の日本基督教会以外に、日本聖公会、日本組合基督教会、日本ホーリネス教会、日本救世軍、日本メソヂスト教会の各教派が、統治期50年の間に台北、台南、台中、高雄、嘉義などの各地に教会や伝道所を設けることとなった。

日本人教会と台湾長老教会とは、特に教派を同じくする日本基督教会（以下、日基教会）に関していえば、統治初期数年間は極めて親しい交わりを有し、日基伝道所設立の際などは、しばしば各地における台湾人信徒が協力を提供している。¹⁹ この当時は互いに言語を介せず、筆談を用いて、あるいは英加宣教師の通訳を通しての交流であったが、互いに未知であることによりかえって、キリスト教徒同士としての信頼感と日本統治への期待とが相まって、交流を容易にしたのであった。²⁰ また、台日信徒双方からの絶大な尊敬と信頼を受けていた CPM 宣教師マッケイ（George Leslie MacKay）、EPM 宣教師キャンベル（William Campbell）やバークレイ（Thomas Barclay）らは、通訳者として、また両者相互への信頼感の根拠として、二重の意味における有効な仲介的存在であった。

しかし、日本統治の開始から数年が経過し、その差別的な同化政策や台湾人と日本人との政治的上下関係、日本人の台湾人に対する民族的優越感が次第にあらわになるにつれ、台湾人信徒は日本人信徒との交流を敬遠するようになる。その結果、特に北部で見られた合同集会のような教会相互の交流は、台日信徒双方から敬愛されていたマッケイの死去（1901年）以後は、皆無になっていった。

元来日基教会は、台湾伝道着手以前より台湾教会との組織的結合を一つの可能性として考慮しており、²¹ 統治初期には在台日本人信徒も台湾教会との「合同」を射程に入れていたようである。しかし、CPM 宣教師フレーザー（Thurlow Fraser）が1904年に記した以下の文章からは、当時の台日キリスト教徒の関係が、「合同」からはほど遠い様相を呈していたことが明らかである。²²

日本人側は（台日教会合同 [union] を）非常に熱心に望んでいるが、これは前途多難である。両民族で互いの言語を解す者はほとんどなく、教会の組

19 高井ヘラー博士論文本論第2章および附論を参照。

20 この典型的な事例が、日本軍による台湾武力制圧期に見られた、澎湖島における日本軍人信徒と現地信徒間の交流である（高井ヘラー、「植民地支配、キリスト教、そして異文化交流」）。

21 この合併意識は、1895年7月6日に開かれた日本基督教会鎮西中会において議決された台湾伝道の建議案において、明確に示されていた（『明治廿八年十月日本基督教会鎮西中会記録』）。

22 Thurlow Fraser, "Recent Works in Formosa," *Presbyterian Record*, Nov. 1904, 511.

織方針は異なっており、しかも片方は被征服民族、もう一方は征服民族である。このような障壁を一両日で取り除くことは不可能である…。

(原文英語、翻訳および括弧内補足引用者。以下、CPM 関連資料の引用に
関しては同様。)

こうして教会および信徒相互の接点が失われていく中、唯一、台日のキリスト教徒同士が積極的に交わる場として残されていた可能性が、エキュメニズムを標榜する YMCA 運動であったといえる。

3 CPM における YMCA 事業への関心

1900年～1910年代の東アジアにおける YMCA 運動は、そのスピリットに賛同する青年キリスト教徒らが主体的に会を設立する形でひろまり、活動をサポートする意味での主事は存在しても、その動きを YMCA として認定あるいは否認する仕組みは存在しなかったようである。日本では、都市 YMCA や学生 YMCA が次々と設立される中、両者それぞれにおいて全国連合組織が設立され、その後1902年になって、両者を含む「日本基督教青年会同盟」(以下、日本 YMCA 同盟)が結成された。²³ 台湾 YMCA も日本 YMCA 同盟に加盟している。²⁴

YMCA 運動が越境的性格を有していたことは既述の通りであるが、帝国主義の脅威あるいは植民地支配の危機にさらされていた東アジアのコンテキストにおいて、それは、日本を含むそれぞれの地域において運動に参加する主体の、国家主義的あるいは民族主義的心情を汲み取る形で展開され、同じ YMCA 同士でも、さまざまに異なる国家的民族的アイデンティティや政治的信仰的スタンスを有する結果を生み出した。日本 YMCA 同盟もまた、当時の日本人キリスト教徒に特有の国家主義的色彩を典型的に映し出す存在であり、1910年代には朝鮮や満洲地域に対して、「キリスト教的帝国主義 (Christian Imperialism)」の意識で臨み、少なくとも一時的には朝鮮 YMCA を同盟組織に取り込むことに成功してい

23 奈良常五郎『日本 YMCA 史』(日本 YMCA 同盟、1959)、106-09。

24 筆者が調べ得た範囲では、1912年8月号の『開拓者』(第7巻第8号)における「加盟青年会一覧表」において既に「台北市基督教青年会」として記載されている。

る。²⁵ この、“Christian Imperialism”とは、当時の日本 YMCA 同盟総主事フィッシャー (Galen M. Fisher) が、「被征服者そして文明的に劣等な民族との真の兄弟愛 (true brotherhood)」(傍点引用者) という意味において、軍事的政治的侵略とは異なるものとして用いた言葉である。²⁶ 北米福音派キリスト教の拡張主義を背景とするフィッシャーが、日本帝国主義とキリスト教の関係をどのようにとらえていたかを示す興味深い表現といえよう。

台湾においても1910年代までには、日本人 YMCA 以外に、台湾人の間で学生を中心とした YMCA 運動が展開されていた。1910年前後には、台北医学専門学校において「台北医専 YMCA」が成立、1914年当時の台北市内では、医学学校、師範学校、農林学校などの官立学校すべてにおいて、いわゆる「学生 YMCA」(以下、学Y)としての YMCA が存在、医学学校では学生総数200名中20名が参加していたという。これらの台湾人 YMCA は民族アイデンティティに強く立脚した運動であり、²⁷ 日本 YMCA 同盟が、朝鮮や満洲に対しては強い拡張意識を有していたにもかかわらず台湾にはほぼ無関心だったこともあって、同盟への加盟を強いられることはなかった。とはいえ、この時期にはこれらの学Yは台湾人同士ではあっても連帯はしておらず、むしろ相互に対立関係にあったと CPM 宣教師のグレイ (A. A. Gray) によって報告されており、活動を指導する主事も有していなかった。²⁸

ここでミッション側の動きを見ると、CPM では、かねてより台北の総督府官立学校に学ぶ台湾人学生への組織的伝道の必要性を痛感しており、1908年の段階で一度、1911年に再び、母国カナダ長老教会大会を通して、北米 YMCA の海外

25 日本 YMCA の国家主義的進歩主義的色彩とその朝鮮および満洲に対する拡張志向については、Davidann, Chapter 5を参照。なお1913年の朝鮮 YMCA の日本 YMCA 同盟加盟に関し、Davidann は在朝宣教師資料から“amalgamate”という語を用い、同様の解釈を示しているが(147)、奈良は「朝鮮 YMCA は日本 YMCA に『合併』されたのでないことは…契約の諸条件に明示されている」(148)と断定しており、Davidann はこれらの資料および議論をふまえていないことから、一概に日本 YMCA による朝鮮 YMCA の強圧的な「合併」とは結論できないと筆者は考える。

26 Davidann, 130.

27 林朝榮「台湾初期 YMCA 活動史」『壹葉通訊』第29期、1984年12月〈原文「参加教会事工的回顧」『瀛光』第120期〉; A. A. Gray to R. P. MacKay, May 15, 1914, Presbyterian Church in Canada Box 4 File 52, in United Church of Canada Archives, Presbyterian Church in Canada. Board of Missions fonds, Correspondence pertaining to the Formosa missions, 122/7 (以下それぞれ PCC, UCCA)。台湾における初期 YMCA 活動史に関する資料は、米国マサチューセッツ州在住の頼永祥博士に提供していただいた。ここに記して謝意を表したい。頼博士によれば、初期 YMCA 史に関する資料の大半は災害により既に失われているということである。

28 A. A. Gray to R. P. MacKay, May 15, 1914.

宣教委員会 (International Committee) に対して台湾人 YMCA のための主事派遣を要請している。²⁹ これは台湾人の学業がいくつも存在しながら、台湾人青年を対象とする働きのための主事が皆無であることを鑑みれば、当然の要請であったといえよう。しかしながら、北米 YMCA 海外宣教委員会の台湾に対する認識は非常に薄く、³⁰ 1910年代には中国・日本・朝鮮いずれにおいても現地信徒が現地 YMCA 同盟の総主事に就任するなど、いわゆる「自伝・自立・自治 (self-governing, self-supporting, self-propagating association)」への動きが高まっていたこととも相まってか、この要請が聞き届けられることはなかった。もっとも、北米 YMCA の海外事業においては、この「自治、自給の力があり、自力で発展するような YMCA」の各国における育成を「背後から援助」することが、「最初からまもられている基本的な方策」であり、³¹ 台湾への対応はこの原則に従ったものともいえる。

特定の YMCA 活動に対する主事派遣は、その活動がどの YMCA 組織との関係においてなされるかを規定する意味を有し、特に植民地における被統治民族の活動という文脈においては微妙な問題を孕んでいた。既に朝鮮においては、日本による朝鮮植民地統治を支持するフィッシャーが、日本 YMCA 同盟を通じて朝鮮 YMCA に対する一種「拡張主義」的な組織合同を強力に推し進め、一方、同じ北米 YMCA 傘下の主事でも、朝鮮 YMCA 総主事のギレット (Philip L. Gillet) らは、次第に朝鮮人側の民族意識に同調し、日本の植民地統治に対する批判的態度を強めていくこととなった。³² 1910年前後の北米 YMCA 海外委員会は、この合同問題をめぐるフィッシャーとギレットの軋轢に少なからず手間を取られており、³³ 北米 YMCA から台湾へ主事を派遣すれば、朝鮮の場合同様、台湾 YMCA の主導権をめぐって宣教師間の摩擦が発生する可能性があるため得策ではない、との判断が働いたであろうことが推測される。

29 *Minutes of the Foreign Missions Committee, Presbyterian Church of Canada* (以下、FMC Minutes), Vol. XXI (1908-09), 18; Report of the Foreign Missions Committee, *Acts and Proceedings of the General Assembly of the Canadian Presbyterian Church* (以下 FMC Report), 1912; Milton Jack to R. P. MacKay, Oct. 14, 1912, PCC Box 4 File 45, UCCA.

30 *Year Book of Young Men's Christian Associations of North America* を見ると、同じ植民地でも韓国は派遣主事一覧において日本とは別に独立した項目を与えられているが、台湾に関しては北米からの派遣主事が1名もないばかりか、International Committee の日本に関する報告においてもまったく言及されていない。

31 奈良、95。現地信徒による自立を支持する原則に関しては、1910年代北米 YMCA の *Year Book* における海外事業の報告にも明確にあらわれている。

32 Davidan, 142-49.

33 *Ibid.*, 145.

一方、CPM では1913年中に神学校校舎を新設することを決定しており、建築の専門知識を有する作業監督とミッションの総務 (business manager) を担当できる宣教師を早急に必要としていた。この候補に挙げられたのがダウイであり、彼が建築士の資格を有する以外に、当時モントリオール州のマギル大学 (McGill University) YMCA 主事をつとめていたことから、CPM による YMCA 事業への介入という可能性が急浮上したのである。

CPM 宣教師の中でも特に学生伝道の重要性を認識し、当時北米シカゴ大学に滞在中だった宣教師のジャック (Milton Jack) は、同年9月頃ダウイと面会し、彼が建築士としての訓練も一般事務能力も十分にあると思われること、さらには YMCA 主事としての経験を有することから、CPM が最重要課題とする台湾人学生への伝道において大きな力を発揮することが期待できる、とカナダ長老教会海外宣教ボード (以下、ボード) へ報告および推薦の書信を送っている。³⁴ これに対し、ボードは早くも10月末にはダウイを宣教師として任命、1913年の秋より台湾において建築および総務に従事する以外に、将来的には台北における YMCA 活動に従事することを決議した。³⁵

ダウイの経歴については、大学において土木工学専門で優秀な成績をおさめたこと、1911年から2年間マギル大学 YMCA の主事をつとめ、その傍らモントリオール神学院において授業を履修していた程度しか明らかでない。³⁶ 1912年当時はおそらく25-6歳の若さだったと思われる。しかしボードはダウイに対して非常な好印象を抱き、彼を CPM 宣教師として任命するにあたり、ボード主事のアームストロング (A. E. Armstrong) が「私の知る限り、過去にこれほど熱心に任命 [の決議] がなされたことはなかった」と述べたほど、その宣教師としての可能性に大きな期待を託したのであった。³⁷ この期待は、彼の建築や総務に関する能力よりは伝道者としての可能性に対するものであり、ダウイ自身もまた、そのような理解において台湾へ派遣されることを望んでいたのであった。³⁸

34 Jack to MacKay, Oct. 14, 1912.

35 *Year Book of YMCA 1911-1912* および *Year Book of YMCA 1912-1913* には有給主事の一覧にダウイの氏名が記載されている。FMC Minutes, Vol. XXV (1912-13), 40; A. E. Armstrong to K. W. Dowie, Oct. 30, 1912; Armstrong to Jack, Oct. 30, 1912; R. P. MacKay to Gauld, Nov. 5, 1912, PCC Box 4 File 45, UCCA.

36 R. P. MacKay to Gauld, Nov. 5, 1912.

37 Armstrong to Dowie, Oct. 30, 1912.

38 Armstrong to Jack, Oct. 30, 1912.

4 日本 YMCA 同盟によるダウイの名誉主事任命

母国教会ボードによるダウイの任命決議は、CPMにおいても大方好意的に受け止められたが、最も古株の宣教師であるゴールド（William Gauld）は、CPMがYMCA事業に参入する可能性に対して懸念を表明している。その理由は、第一に、カナダ長老派のみによるYMCA事業は、非キリスト教徒が大半を占める官立学校の日本人教師陣の反発を引き起こす可能性があり、それよりは日本人諸教会（日基、組合、聖公会）と協同の超教派YMCAを組織し、教師陣からも協力を得られる形態にすべきであること、第二に、YMCA事業には教室、談話室、図書室、体育館、シャワー設備などを備えた会館が必要であるなど、かなりの財政的負担になるが、CPMによる中学教育事業が軌道に乗れば、5年以内に3万から4万ドルの出費が見込まれることを鑑みても、ボードがYMCA事業を財政的にまかなえるか疑わしいこと、の2点であった。³⁹

これらの点に関しアームストロングは即座にゴールドへ返信をしたため、ボードとしては台湾におけるYMCA事業に介入する意図はないこと、ダウイがYMCA主事のような形で学生伝道に従事することは望ましいが、YMCAから独立した形で行うことも可能である、と弁明している。⁴⁰ この、YMCAを通しての青年伝道か、それともYMCAとは別の青年伝道事業か、という問いはその後懸案事項だったらしく、1913年6月にダウイ自身が、YMCA海外宣教委員会総主事のモット（John R. Mott）および日本YMCA同盟総主事のフィッシャーと協議を行ったこと、最終的な決断はボードに委ねるが、個人的にはCPM宣教師としての活動に加えて、台北のYMCA活動に従事することを希望すると述べた書信を、アームストロング宛に送っている。⁴¹

このように多少の物議をかもしながらも、ダウイは、それまでの台湾派遣宣教師にかつてない多大な期待を背負って1913年10月31日台湾へ到着、11月中旬には同僚のマクレオド（Duncan MacLeod）と台湾南部への視察を行い、彼をして「素晴らしい人物（a splendid fellow）」といわしめている。⁴² その後、一年間の

39 Gauld to Armstrong, Nov. 21, 1912; Gauld to R. P. MacKay, Dec. 3, 1912, PCC Box 4 File 45, UCCA.

40 Armstrong to Gauld, Jan. 3, 1913, PCC Box 4 File 46, UCCA.

41 Dowie to Armstrong, June 30, 1913, PCC Box 4, File 47, UCCA. なおこの書信によれば、YMCAの件に関する詳細を述べた別の書信が複数添付されているはずだが、保存されていないため内容は不明である。

42 FMC Report, 1914, 108-113; MacLeod to Armstrong, Nov. 22, 1913, PCC Box 4 File 50, UCCA.

台湾語学習を経て、1914年9月より日本語学習のため日本へ派遣されている。⁴³

1910年代半ばという時期は、CPMも母国教会ボードも、日本統治下において、少なくとも教育事業に従事する宣教師については、台湾語のみならず日本語の習得が不可欠であると認めざるを得なくなっていた時期であった。⁴⁴ とはいえ、語学学習のために日本へ派遣されたCPM宣教師は、ダウイ以前には中学教育事業に従事することが決まっていたG. W. マッケイ (George William MacKay、G. L. マッケイの長男) のみであり、⁴⁵ 3年という連続した期間を二言語学習のために費やしたのはダウイが初めてであった。

当時のCPMは、日本語で近代教育を受けた青年層における無神論的思想や自由主義神学の影響への対応、信徒教員養成のための日本内地派遣の必要、南北合同の神学院設立問題など、いくつもの懸念事項を抱えていた。それに加えて浮上した宣教師の日本語学習問題は、ただでさえ「語学に特に秀でた者が一人もない」状況のCPMにとって、さらなる人材不足と大幅な出費を余儀なくされることを意味する、頭の痛い問題であった。⁴⁶

さらにこの状況は、ダウイ招聘に大きな役割を果たしたジャックの辞任問題をも引き起こした。もとよりジャックは宣教師が日本語学習の機会を与えられるべきことを主張していたが、この件に対するボードの消極的態度に加え、無神論や自由主義神学を主張する青年層への対応における彼自身の信仰理解について、同僚のマクレオドから糾弾され、CPMの保守的信仰の立場に限界を感じたことか

43 FMC Report, 1915, 111-117.

44 後にCPMは、教育宣教師は一律二年間の日本語学習の機会が与えられることを承認している (G. W. MacKay to Armstrong, Mar. 15, 1924, United Church of Canada Board of World Mission Fonds 503 Series 17 (以下UCC) Box 1, File 2, UCCA)。この変化の背景には、1919年の台湾教育令公布以前に、既に1912年の台湾公学校規則改正、1913年の教科書改正において、日本語教育における母語の使用を禁止することを明らかにした台湾総督府の教育政策の影響があると思われる (石剛『日本の植民地言語政策』明石書店、2005年、50)。ただし、台湾語で教育を行っていた私学のミッションスクールに対する具体的な圧力が何であったか、ここでは十分に説明することができなかった。今後の課題としたい。

45 FMC Report, 1914, 108-113。しかもマッケイは3ヶ月後には神学校の教員が足りないという理由で台湾へ呼び戻され、中学校長就任後に不自由な思いをすることを余儀なくされている (G. W. MacKay to Armstrong, Mar. 15, 1924)。

46 Gauld to R. P. MacKay, Jan. 21, 1916, PCC Box 5 File 60; R. P. MacKay to Gauld, June 3, 1916, PCC Box 5 File 61, UCCA。CPMの男性宣教師は常時4-5名であったが、語学習得以外にも休暇や病などの事情により、深刻な人材不足に陥りやすい状況であり、日本滞在は当然ながら多大な財政的負担となった。

ら、1916年に辞任を表明するに至っている。⁴⁷

このような二重三重の問題を抱えながらも、CPM がダウイを日本へ派遣することを決定した事実からは、台湾語および日本語共に流暢な人材の絶対的必要性と、ダウイの伝道者としての潜在的可能性に対する並々ならぬ期待とが読み取れる。⁴⁸

語学学習と平行して、ダウイの台湾における活動の手はずも徐々に整えられていった。ダウイの台湾 YMCA への関与については、在台日本人関係者との間で早期に合意に達していたらしく、同盟機関誌『開拓者』1914年2月号には、「台北青年会」がダウイを「名誉主事として依頼する事と相成り候」と報告されている。⁴⁹ ダウイは二年間の日本滞在中、東京外国語学校 YMCA のリーダーとして40名ほどのメンバーを有する聖書研究会を指導、⁵⁰ フィッシャーとも台湾 YMCA の件について熟議する機会があったものと思われる。1915年春頃、フィッシャーは台湾を短く訪問し、台湾 YMCA の活動を視察するほか、CPM 宣教師と面会しているが、その主要目的はダウイの件に関する協議だったと考えて間違いないだろう。⁵¹ ダウイが帰台する1916年には、彼を台湾における青年伝道の働きのために日本 YMCA 同盟名誉主事として正式に任命すること、任期は二年間であり延長可能であること、彼は台北における宣教活動の時間の半分以上を YMCA 主事としての活動に費やすこと、給与に関しては CPM が全てもつこと、を提案した書信がフィッシャーより CPM へ送られた。CPM は協議の結果、日本 YMCA 同盟からの任命なしに CPM 宣教師が台湾で YMCA の働きに従事することは困難であると判断し、その条件を受け入れたのである。⁵²

5 台湾 YMCA の組織改編

以上の経緯により、それまで日本人中心で行われていた台湾 YMCA の事業に、

47 Jack to R. P. MacKay, Jul. 22, 1916, PCC Box 5 File 62, UCCA.その後ジャックは紆余曲折を経て1917年10月にソウルへ派遣された (FMC Minutes, Vol. XXX (1917), 78)。

48 Gauld to R. P. MacKay, Jul. 8, 1914, PCC Box 4 File 53, UCCA.

49 「同盟会だより」『開拓者』第9巻第2号、1914年2月。

50 “News and Notes,” 『開拓者』第9巻第12号、1914年12月。

51 Galen M. Fisher, “A Short Visit to Formosa,” 『開拓者』第10巻第6号、1915年6月; FMC Report, 1917, 80.

52 Jack to Armstrong, Dec. 18, 1916, with Minutes of the Men’s Council, Oct. 5, 1916, attached; PCC Box 5 File 63, UCCA.

CPM がダウイを通して参入することを正式に承認したのは、1916年10月であった。既述の通り、前年には深津基一が専任主事として台湾 YMCA に就任しているが、日本 YMCA 側はその前後より、ダウイが帰台後に名誉主事として台湾 YMCA の働きに従事するものと理解しており、深津もこの点については承知していたものと考えられる。⁵³

1916年夏に台湾へ戻ったダウイは、早速、CPM 宣教師としての仕事の傍ら、YMCA 主事としての仕事に取りかかり、台北の YMCA 会館における夜間英語学校の教師、そして英語聖書研究会の指導に従事することとなった。⁵⁴ ダウイの主事就任に伴い、CPM では YMCA 事業を、福音伝道、医療事業、教育事業に続く第四のミッション事業として理解し、協議や報告事項に含めるにいたっている。⁵⁵

ダウイが名誉主事として台湾 YMCA に関わったのは、事実上それから3年後の1919年夏までである。しかしその在任中、台日信徒のいわば仲介役であるダウイを通して、両者に CPM を加えた三者協同の YMCA 組織への改編、そして三者協同の活動が試みられることとなった。

その第一歩として、1916年9月、ダウイの主事就任と前後して組織上の改編が行われ、日本人3名、台湾人2名、「外国人」（事実上 CPM 宣教師を指すものと思われる）2名を理事とする新たな台湾 YMCA 理事会が誕生している。⁵⁶ これは既に専任主事であった深津との共同作業であろう。しかし同年12月には、深津が満洲における教会牧会に従事するため主事を辞任したため、以後、1920年8月に櫻井齋が来任するまでの3年間半、ダウイは台湾 YMCA における唯一の主事として、台湾 YMCA 改編のために力を注ぐこととなった。⁵⁷

その後、1917年初頭には規約改定が行われ、牧師や年配の信徒で構成されてい

53 “Notes and News,” 『開拓者』第11巻第2号、1916年2月。

54 FMC Report, 1917, 79; Minutes of North Formosa Union Council, Oct. 5, 1916, PCC Box 5 File 63, UCCA; FMC Minutes, Vol. XXIX (1916-17), 49-50; Ibid., 125; Dowie’s report, Apr. 15, 1917, PCC Box 5 File 65, UCCA.

55 FMC Report, 1917, 74-75.

56 FMC Report, 1917, 80.

57 Dowie, “Annual Report for the Year Ending September 15, 1917. Young Men’s Christian Association, Taihoku, Formosa, Japan”, PCC Box 5 File 66, UCCA. もっとも日本人側からすれば、椿坂、濱井、大橋主一らが信徒「主事」として数年来奉仕しており、ダウイについても「専任」でないことから、その「主事」としての存在に対する理解は低かったようである（「台湾基督教青年会」『開拓者』第14巻第10号、1919年10月）。牧尾もダウイの存在に一言も言及していない。ただし、同盟から「主事」としての任命を受けていたのはダウイのみであり、その点において専任主事に近い役割を追っていたと考えられる。

た旧理事は顧問に昇格、新たに市内の5教会（大稲埕長老、艋舺長老、日本基督、聖公会、日本組合）⁵⁸ から信徒1名ずつが理事として選ばれ、外国人1名と合わせた計6名によって構成される新理事会が誕生、同様に各教会から選ばれた2名ずつに加え、外国人2名を合わせた12名が「主事」に選出され、組織の運営に携わるようになった。この時点で日本人会員は90名、台湾人会員が37名の計127名で、この内124名がキリスト者であった。⁵⁹ なお、理事長には日本人の芳賀鋏五郎が選ばれている。⁶⁰

1916-17年の台湾 YMCA の活動は、決して盛んではなかった。CPM の報告でも、当時の YMCA 活動は、会館が手狭なことから英語聖書研究会、英語学校、そして多少の福祉活動に留まっているとされている。⁶¹ しかしダウイの年度末報告（1917年9月）⁶² によれば、若い世代の信徒を台日双方の教会から組織に取り込んだことにより、YMCA には新たな活気が生まれていた。英語学校経営も軌道に乗り、生徒は97名を数え、財政面でも54円の黒字であった。聖書研究会には7-8名が集い、うち日本人1名が台北日基教会において受洗している。さらにダウイは、会館建築のための土地探しを行うなど、台湾 YMCA の基礎作りと拡張に向け、新主事および新理事と共に取り組んでいくことに強い意欲を示していた。1917年末には、YMCA として台北における貧民のための物資給付を行い、台日双方の教会が協同で活動する機会になったことを、勇んで報告している。⁶³

1917年初の組織改編は、台湾人教会の合意を得たものでもあることから、CPM およびダウイが仲介役となって行ったものと考えられる。日本人中心だった台湾 YMCA が、この改編をきっかけとして、台日青年「双方」に必要な健全な娯楽施設を提供し、⁶⁴ 台日キリスト教徒が「協同」で活動でき、台日教会のいずれにもアクセスできる場と変革していく可能性に、⁶⁵ CPM は大きな意義を見出していた。

このような「協同」YMCA 構想のきっかけを作ったのは、1915年に台湾を訪問したフィッシャーであると考えられる。フィッシャーはこの台湾訪問において印象に残った事柄として、台日信徒双方において「相互への誠心誠意の思い」と

58 長老教会は台湾人、その他は日本人の教会であった。

59 Dowie, "Annual Report for the Year Ending September 15, 1917."

60 牧尾、124。

61 FMC Report, 1917, 80.

62 Dowie, "Annual Report for the Year Ending September 15, 1917."

63 "News and Notes," 『開拓者』第13巻第2号、1918年2月。

64 FMC Report, 1917, 80.

65 FMC Report, 1918, 88.

「両民族が平等の立場で参与することのできる会への強い要望」があったことを挙げており、その点について CPM も1917年の事業報告において言及しているからである。⁶⁶「被征服者そして文明的に劣等な民族との真の兄弟愛」を日本 YMCA の使命とも理解していたフィッシャーにとって、YMCA を通して台日信徒間に「真の兄弟愛」が結ばれることを期待する意識は、当然少なからずあったであろう。しかしそのような要素を差し引いても、彼の報告から、少なくとも一部の台湾人信徒において、日本人と「平等の立場」で参与できるという条件において、「協同」YMCA への「要望」が実際に存在したであろうことは想像できる。植民地台湾において、「その基本的生存権から参政権まで、〈内地人〉とのあいだに政治的、社会的そして精神的、文化的なあらゆる面で差別する政策」下、⁶⁷常に日本人から「二等国民」「チャンコロ」などと見下げられていた台湾人にとって、YMCA という限られた場においてであっても、日本人からの蔑視を受けることなく、同等の立場で共に活動に参加し、同等にその運営に関わることができるという話は、魅力的だったであろう。また、日本人同様の政治的経済的権益を受けることのできない状況において、キリスト教という共通項を通して、政治権力を有する日本人（特にキリスト教徒の多くが総督府官吏であった）と協力関係を結んでおくこと自体は、決して損なことではなかったはずである。⁶⁸一方、日本人信徒の側に十分な「合同」志向があったのは既述の通りである。こういった意味において、フィッシャーがほのめかした「協同」の YMCA とは、確かに台日キリスト教徒双方の意向を汲み取ったものでもあった。

しかしながら、「協同」の実現に向けて具体的な方策をとっていった CPM においては、フィッシャーの提唱するような「真の兄弟愛」といった理想主義は見られない。彼らは既に台日信徒の歩み寄りが困難であることを十分に経験しており、その関心は両者の連帯といった「理想」よりも、むしろミッション・スクール以外の学校に通う台湾人学生への伝道の必要、という「現実」にあった。⁶⁹官立学校の学生への伝道活動を CPM として行えば、反キリスト教的な日本人教師

66 Fisher, "A Short Visit to Formosa," 『開拓者』第10巻第6号（1915年6月）；FMC Report, 1917, 80.

67 石剛、60。

68 同様の発想と行動は、台湾武力制圧期の澎湖島において見られた日本軍人キリスト教徒と現地キリスト教徒との交流の事例にも見られる点である。高井ヘラー論文（2005）参照。

69 マクレオドは、YMCA は「特に東方においては信仰的な面があまり強調されない」ため、台日信徒が「協同」の活動に対して否定的であると指摘、ここに CPM の YMCA に対するやや否定的な評価を読み取ることができる（MacLeod to R. P. MacKay, Feb. 20, 1918, PCC Box 5 File 68, UCCA）。

陣からの反感を招くことは必須であり、それを未然に防ぐためにも日本人信徒の協力を取り付け、いわばミッションと日本人が協同することが重要であるとの理解が、CPM にあったのは既述の通りである。CPM がダウイをして YMCA に介入することを承認した最大の理由も、元来はそこにあった。⁷⁰ しかし同時に、日本人中心である台湾 YMCA には台湾人青年は定着せず、彼らへの伝道も実現しない。台湾 YMCA を台日信徒協同の性格に変えなくてはならない最大の理由は、そこにあったのである。ここにおいて、CPM の利害を代表して日本人と協同関係を築き、かつ台日信徒の協同関係を促進することのできる唯一の人物が、台湾語および日本語の双方を習得していたダウイであった。ダウイ本人の理解がどのようなものであれ、CPM がダウイを台湾 YMCA にいわば「出向」させ、日本人との協同関係を築き、また台日信徒の協同を図ることによって、その本当の目的である台湾人青年伝道を推し進める、という構造になっていたのである。極端に言えば、CPM にとって YMCA は「目的」ではなく「手段」にすぎなかったともいえる。

6 「協同」YMCA の頓挫

CPM におけるある種打算的な YMCA への介入にもかかわらず、当事者のダウイは、台日信徒が YMCA という場において協同で活動することに、フィッシャーにも通じる肯定的価値を見出していたと思われる。しかしながら、組織改編によって理事会に台日信徒双方が加わり、夜間学校にも台日双方の生徒があるにもかかわらず、両者協同の活動を軌道に乗らず、ダウイも1年目の終わりにはその困難さを認めざるを得なかった。⁷¹

さらに、組織改編からわずか1年後の1918年2月には、日本人によって運営を牛耳られていると感じた台湾人側が、実行 (executive) 委員会において、台日別々の YMCA 組織があるべきことを提案、⁷² 同年度のミッションによる報告でも、スペースの限定された同一の会館内で台日青年双方のための活動を同時に進行させるのは、1) 会館が日本人居住地域に位置していること、2) 両民族の言語上の障壁、3) 被統治民族である台湾人青年が YMCA の諸集会において日本人官僚に会うことに気まずさを感じる、などの理由から困難であり、台湾人

70 Gault to Armstrong, Nov. 21, 1912; Gault to R. P. MacKay, Dec. 3, 1912, PCC Box 4 File 45, UCCA.

71 Dowie, "Annual Report for the Year Ending September 15, 1917."

72 Letter MacLeod to R. P. MacKay, Feb. 20, 1918; FMC Minutes, Vol. XXX (1917-18), 122-23.

青年のための別の会館が必要であると結論付けられている。⁷³

ここで「言語上の障壁」という点に関し説明を加えるならば、1910年代の台湾では、初等学校教育を通じて日本語教育を受けた台湾人児童の割合は、1918年の段階で16%弱程度に止まっており、しかも日本語は通常、学校以外の場ではほとんど話されていなかった。⁷⁴ 長老教会における使用言語も台湾語であった。したがって、たとえ高等教育を受ける機会に恵まれたごく少数の台湾人学生が、日本語を解するのに困難はなかったとしても、YMCA 活動において母語の使用を望み、あえて日本語の使用によって、自らを文化的劣等者の立場に置くことを望まなかったのは、当然だったといえる。

一方の日本人にしてみれば、元来台湾人との「合同」志向を有していたとはいえ、それまで日本人中心で行い、日本 YMCA 同盟にも加盟していた台湾 YMCA が、CPM 宣教師の主導の下に台湾人信徒と協同の YMCA 組織に改編したことは、大きな方向転換であっただろう。それに加えて日本人青年の理解するところの YMCA 路線を台湾人の望む方向へ多少でも転換するということは、両者の力関係や日本人の台湾人に対する優越意識を鑑みれば、許容不可能な領域であったであろうと考えられる。

このようにして台日青年間の隔たりがあらわになるにつれ、CPM でも台日青年が協同で活動することの困難さを悟り始めた。母国教会ボードも、ダウイがその能力をより発揮できるようにと、YMCA を離れて伝道活動に従事する可能性を探り始め、フィッシャーに台湾人の専任主事候補を探してほしいと依頼しているが、適任者は見つからないとの回答を得るのみであった。⁷⁵ CPM にとっての問題は、ダウイが台湾 YMCA の名誉主事にとどまり、且つ台湾人青年が台湾 YMCA から離脱した場合、ダウイの働きが自動的に日本人青年を対象とするものとなり、それは台湾人を宣教対象とする CPM 事業の枠外であるという点であった。マクレオドはこのような事情を考慮し、ダウイが YMCA 事業を離れ、休暇年を取る予定の G. W. マッケイの不在中、ミッション中学の校長代理に就くべきであると提案している。⁷⁶

しかしながらダウイ自身は、1918年の段階ではまだ楽観的であった。彼は将来的に合同の YMCA 会館が建築される可能性を想定し、それまでに両者の活動が

73 FMC Report, 1918, 87.

74 石剛、50および62。

75 Fisher to R. P. MacKay, Mar. 4, 1918, PCC Box 5 File 68; R. P. MacKay to Fisher, May 26, 1918, PCC Box 5 file 69, UCCA.

76 MacLeod to R. P. MacKay, Feb. 20, 1918.

分裂することのないよう、活動をある程度まで協同のものに保っておく必要性と、自身が両民族の橋渡し役となる責任を感じていた。⁷⁷ ダウイにとって最も困難なことは、台日青年間の隔たりよりは、CPMとYMCAの業務を兼任しているために生じる絶対的な時間不足であった。自身とボードの期待とは裏腹に、ダウイは初年度から会計、建築現場での労働者への報酬の手配、中学校新校舎および艋舺教会堂の設計、神学校での英語教師、中学校での体育教師などのCPM業務に追われ、同時に日本語と台湾語の学習をも継続していたため、YMCAの働きに対して思ったほどの時間を費やすことができずにいた。それでも英語学校を通して、「ミッションによる〔従来の〕伝道では届かない層」である医学専門学校や国語学校の台湾人学生数名が、日本人教会に通い始めるなどの「収穫」はあった。YMCA主事を辞めることによって、これらの台湾人青年との接点を失うことは、ダウイの望むところではなかったのである。⁷⁸

しかし、台日信徒両者の関係を改善する方策は浮上しなかった。1919年になっても台日青年間の関係は相変わらず疎遠で、会館において従来通り英語学校が行われる一方、台湾人青年の活動は独自に毎月の集会を開催するというように、日本人の活動から次第に分離していった。これらの集会は市内の3長老教会を会場として行われ、出席人数は200名前後、最も多いときには約800名だったという。講演の内容は教育的かつ信仰的で、教会やキリスト教にまったく縁のない人々も参加していた。⁷⁹ このような報告から、台湾人青年が考えるYMCA活動と、日本的YMCAの活動とには大きな隔たりがあり、台湾人信徒が台湾YMCAに違和感を持った理由の片鱗が読み取れよう。

「協同」YMCAが存続の危機にあったこの年はちょうどダウイの休暇年度にあたっていたが、彼は妻の体調不良もあって年末に台湾を離れている。これによってYMCAの英語学校経営は大きな打撃を受け、日本人関係者の嘆くところとなった。⁸⁰ 同時期、ダウイは同じく妻の体調不良を理由にCPM辞任をボードに申し出、即座に認められている。⁸¹ この決定に対し、マクレオドは、中学校長のG. W. マッケイが休暇年をとることができるようダウイの任期を延長することをポー

77 Dowie to MacKay, May 6, 1918, PCC Box 5 File 69, UCCA; FMC Minutes, Vol. XXXI (1918-19), 7.

78 Dowie's report, Apr. 15, 1917; Dowie to R. P. MacKay, May 6, 1918; FMC Minutes, Vol. XXXI (1918-19), 7.

79 FMC Report, 1919, 91.

80 「台湾基督教青年会」『開拓者』第14巻第10号、1919年10月。

81 FMC Minutes, Vol. XXXII (1919-20), 60; R. P. MacKay to Dowie, Dec. 23, 1919, PCC Box 6 File 75, UCCA.

ドに要請したため、ダウイは更に2年間台湾で働くことに同意し、1921年に台湾へ戻り中学校長代理をつとめることとなった。この時点でダウイの主要関心は次の任地が朝鮮になるか日本になるかという点に移っており、台日信徒「協同」の台湾 YMCA 構想は事実上消え去ったといえよう。⁸²

ダウイが去った後の台湾 YMCA は、当然のことながら日本人中心に戻って行くのであるが、1920年8月に櫻井齊を専任主事に迎えた段階では、理事8名、顧問委員9名は台日各教会の牧師で構成されていたとあり、まだ「協同」組織の枠組みは保っていたことがわかる。会員数は同年12月に350に達するなど躍進し、1921年8月には台湾ではじめてのプールを開設、同時期に地方部が淡水、基隆、新竹、台南、嘉義、高雄の各地に設立されている。⁸³

1921年7月には台湾 YMCA として第一回目の夏季学校が台北州草山で行われたが、講師や教師陣20名のうち、わずか2名ではあるが台湾人牧師（陳清義、郭希信）が含まれ、ダウイも招かれていた。⁸⁴ しかし、1924年に第二回夏季学校が開催された際には、講師は当然のこと、牧師陣も日本人のみであり、⁸⁵ この時点までには台湾人と日本人の活動は完全に分離していたと考えられる。

以上の、台日信徒「協同」組織が頓挫にいたった一連の経緯を鑑みると、これは「二者」協同ではなく、台湾人信徒・日本人信徒・CPM「三者」協同の物語だったことがわかる。三者はそれぞれの論理において「協同」の YMCA を望み、たとえ三年間とはいえ共通の目標に向かって多少なりとも努力をした。しかし日本人による「力の差異」の押し付けを拒絶し、自らが主体的に活動できる場を別に望んだ台湾人信徒の当然の要求という要素に加え、日本 YMCA 同盟および北米 YMCA のいずれからの実質的サポートもなく、YMCA 事業に懐疑的でさえある保守的な CPM の宣教師という立場では、植民地における「支配-被支配」民族間に「真の兄弟愛」を実現させる努力も独りよがりでしかないことを見て取ったダウイが、台湾 YMCA に見切りをつけた結果、「協同」構想は何事もなかったかのように消え去ったのであった。

82 MacLeod to R. P. MacKay, Jan. 13, 1920; Dowie to MacKay, Jan. 19, 1920; Armstrong to Dowie, Jan. 23, 1920, PCC Box 6 File 76, UCCA.

83 牧尾、124。

84 「台湾青年会第一回夏季学校」『開拓者』第16巻第7号、1921年7月。

85 「台湾 YMCA 夏期学校」『基督教世界』第2126号、1924年9月。

7 ダウイの辞任

宣教ボードおよび CPM から未曾有の期待を受けて台湾へ赴任したダウイは、こうして3年間の語学学習の機会を特別に与えられ、台湾において宣教師および YMCA 名誉主事として3年間働いた後、休暇年を経て1921年に帰台、以降、中学校長代理、建築や会計の業務などに専念したが、1924年に再び辞任を申し出、1925年初頭に台湾を離れている。最終的な辞任の原因は、意外にもジャックと同じく、その信仰理解に関するものであった。⁸⁶

ダウイによる正式な辞任申し出は1920年と1924年の2回あったが、いずれの場合にも母国教会ボードは彼の事情に深い理解と同情を示している。

1920年の段階では、アームストロングはダウイが台湾における働きに戻らない場合を想定し、彼を東京に派遣する可能性を検討、その場合の仕事として、1) 台湾および朝鮮に関する日本政府の見解をボードに報告する、2) 台湾および朝鮮におけるカナダ長老教会ミッションの建築事業を監督する、3) 台湾南部出身の在京台湾人留学生への伝道する、との三点を、マクレオドに提案している。同じ書信において、「我々 [ボード] としては彼を失いたくない。彼が東洋にこれほどまでに適応したことを鑑みても、彼の将来はそこにあると我々は考えており、我々が彼を用いなければ、必ずや YMCA が喜んで彼を引き受けるだろう」とさえ述べている。⁸⁷ ボードのみならず現場にいたゴールドも、ダウイは高い語学能力と異文化への適応能力を示すとともに、日本人台湾人にかかわらず、東洋人に対する「天性の愛 (natural love)」を有していると、賞賛している。⁸⁸

その後、1924年にダウイの辞任がほぼ確定した際にも、アームストロングは彼を慰留するために書信を送り、その中で次のように述べている。「我々 [ボード] がいかに貴男を高く評価し、貴男ほどの熱情と能力を備えた人材を失うことを残念に感じていることか。貴男はいわばミッションと台湾教会との連絡役であり、同時にミッションと台湾総督府との連絡役でもある。とりわけ台湾総督府に関する理解において貴男の右に出る者はないことは、自身よくご存知でしょう。」⁸⁹

このような記述からは、ダウイが実質的には6年ほどしか CPM 宣教師として

86 Dowie to R. P. MacKay, May 13, 1923, PCC Box 6 File 89; MacLeod to R. P. MacKay, Nov. 1, 1924, UCC Box1 File 2, UCCA.

87 Armstrong to MacLeod, PCC Box 6 File 77, UCCA.

88 Gauld to Armstrong, Dec. 12, 1919, PCC Box 6 File 75; Gauld to R. P. MacKay, Apr. 24, 1922, PCC Box 6 File 85, UCCA.

89 Armstrong to Dowie, June 28, 1924, UCC Box 1 File 3, UCCA.

働かなかつたにもかかわらず、CPM およびボード双方から、異文化への高い適応能力と高い語学能力、さらには台湾人および日本人とミッションとの仲介的能力を認められ、重宝されていたことが読み取れる。

その彼が最終的に辞任する原因となったのは、妻が台湾の気候に適應できず体調不良に陥ったことではなく、1920年代当時北米においてキリスト教会、特に長老派を揺るがしていた信仰理解に関する論争—自由主義神学をとるか、保守的「正統」にとどまるか—に対する彼の見解と、それに対する CPM 内の反発であった。

ダウイは両神学の対立について、自由主義派と保守派とは争うことなく互いに自説を主張し、どちらが正しいかについては時間の判決に委ねるべきであると考えていたが、彼の個人的見解自体は自由主義神学の方にかなり傾いていた。⁹⁰ ボードに提出した“Statement of Faith”によれば、彼は教条主義に対する懐疑的立場から、キリストの「神性」に関して、いわゆる正統からは逸脱した理解を有し、処女降誕、十字架の死による贖罪、肉体の復活、聖日の遵守なども本質的な事柄ではないと考えていた。⁹¹ 母国教会ボードはジャックの場合にもそうであったように、このようなダウイの信仰理解を許容範囲と認め、同様の理解を説教で述べても構わないと許可、しかしボードの決定如何にかかわらず、現場の CPM においては、自由主義神学を容認するような考えを現地教会において説教することに対して、マクレオドやウィリアムズ (G. A. Williams) が強く反発、マクレオドに至っては辞任も辞さない構えであった。ここに至って、マクレオドの宣教師としての器量に心から敬服していたダウイは、自分が辞任するほかないとの結論に達したのである。

ここで注目したいのは、ダウイが語学習得や異文化適應において高い能力を示したことと、キリスト教信仰理解において、従来の保守的信仰を相対化する自由主義的神学に対しても開かれた態度で臨んだこととの、相互関連性についてである。

この異文化理解と信仰理解の問題については、大江満が、異端嫌疑にもとづいて解雇された米国聖公会遣日宣教師 C・T・ブランシェーおよび H・D・ページ

90 Dowie to R. P. MacKay, May 13, 1923, with Dowie's "Statement of Faith" attached, May 13, 1923, PCC Box 6 File 89; Dowie to Armstrong, Apr. 12, 1924, UCC Box 1 File 3, UCCA.

91 Dowie, "Statement of Faith."

のケースを取り上げ検討している。⁹² 「日本語が堪能で、日本文化にも関心が深い、異文化理解に優れた」ブランシェーおよびペイジは、任地においては宣教師として高い評価をうけながら、母国教会ボードによって異端嫌疑をかけられ解雇された人々である。これは、ダウイが母国教会ボードから容認されながらも、任地のミッションにおける反発から辞任にいたったこととは逆のパターンであり、「保守—正統」論議と異端嫌疑とはかなり性格の異なる問題でもある。しかしながら、これらの宣教師のケースに共通しているのは、いずれも異文化理解および適応の能力を示し、かついずれも「正統」あるいは「保守」の枠に留まらない信仰理解を有するようになった点である。

吉田亮は、「越境」という語を単なる地理的な現象に限定せず、「地理的越境」に伴う「国家的越境」および「文化的越境」という、越境者個々人の内面にも関わってくるレベルにおいてもたらされる変容現象を説明する概念として、応用的に用いている。⁹³ 異文化の地に派遣された上記の宣教師らが、「地理的越境」に伴って異言語を習得し異文化への理解を深め、自文化と異文化の間を自由に行き来するようになったことを「文化的越境」と定義するならば、信仰理解において一つの信仰理解と、その枠外にある信仰理解との間を行き来するようになることを、「宗教的越境」ということもできよう。この「宗教的越境」もまた、しばしば「地理的越境」に伴う新たなものとの「出会い (encounter)」を契機としてもたらされるものであり、例えばダウイの場合には、近代日本教育を通じて自由主義神学の影響を受けた台湾人学生たちとの議論を通して、従来とは異なる神学的理解へと転じた側面もあるだろう。異文化理解への志向と異質な信仰理解への志向とは、一見関連のない事柄のように思えるが、個々人における文化的そして宗教的営みにおける「越境」(trans-border) への志向と能力としてとらえれば、両者は一種の連続性を有しているといえるのではないだろうか。

おわりに

キリスト教はその歴史を通じて、地理的に、文化的に、また国家的に越境し続

92 「異文化理解か異端嫌疑か—解雇された米国聖公会遣日宣教師 (上)—C・T・ブランシェーの信仰治癒運動」『立教学院史研究』第2号 (立教大学立教学院史資料センター発行、2004年3月25日)、38-60. ; 「異文化理解か異端嫌疑か—解雇された米国聖公会遣日宣教師 (下)—H・D・ペイジのアーヴィング派嫌疑」『立教学院史研究』第3号 (立教大学立教学院史資料センター発行、2005年3月25日)、40-73。

93 吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』(東京:日本図書センター、2005年)、「序章」を参照。

けてきた運動である。それは常に越境しながらも、「教会」というかたちで個々の国、民族、文化、言語と同一化することによって地域に定着してきた。19世紀のヨーロッパにおいて誕生したYMCAは、何よりも、この「教会（教派）」の壁を超えるという意味において越境を成し遂げた点に、最大の意義を有していたキリスト教運動である。それゆえ、YMCAの精神に賛同するキリスト教青年層が、世界各地において、教会組織から自由な形で、まったく主体的に、青年の持つエネルギーを注ぎ込む形で参与することが可能だったのであり、多かれ少なかれ自国の政治権力、特に帝国主義的権力体制に組み込まれていた教派教会による海外伝道事業とは一線を画す、現地人主体の運動という側面を強く有していた。しかし、このYMCA運動も、各々の国や地域において組織化されることにより、教会同様、「境界」を有し、各々の国家・民族意識を代表する存在になったことは、当然の経緯であろう。

本稿で扱った、台湾YMCAを舞台とする台日信徒そしてCPM「協同」体制への試みにおいては、カナダ長老教会海外宣教ボード、CPM、北部台湾長老教会、日本YMCA同盟、北米YMCA海外宣教委員会、在台日本人教会などの、さまざまな国家的（民族的）文化的歴史的背景を有するキリスト教組織の思惑がからみ、一種の交差点の相を呈している。そこにはキリスト教の越境性と、それを担う主体の個別性が生み出す緊張関係があり、さらに日本による植民地統治という政治権力構造が、あらゆる関係性を規定する力をもって覆いかぶさっていた。

このような中で、台湾YMCAが「協同」のものになり得る可能性は、日本人キリスト教徒が台・日・加三者中最大の政治的権力を有しながら植民地統治の論理を信奉し、⁹⁴かつその多くが統治当局関係者であったという条件から、限りなく小さかった。1910年代の台湾社会における日本化、すなわち「同化」への政治的圧力が比較的小さく、日本人信徒もあえて台湾人信徒に「同化」を要求する契機を持たなかったことが、台湾人に日本人からの分離の自由を与えていたともいえる。台湾YMCAを拠点に台日「協同」の活動が日本人主導であらためて試みられたのは1930年代だったが、その背景には、軍国主義の台頭する状況において台湾総督府が提唱した「内台融和」—すなわち「同化」—へのより強い政治的社会的圧力があり、そのような力が外側から加わってはじめて、台湾人信徒の「同化」を前提とする「協同」体制を、日本人信徒が選択肢として考えることが可能になっ

94 これは、つきつめれば『臣民』の定義が『キリスト者』の定義に優越していたということになる。高橋由典「戦争協力の論理と心理—キリスト教の事例—」戦時下日本社会研究会『戦時下の日本：昭和期の歴史社会学』（行路社、1992年）、331。

たと説明できる。⁹⁵

問題は、「協同」という発想の出所である。フィッシャーの提唱した「真の兄弟愛」としての“Christian Imperialism”、そしてそれを受けての CPM による台湾 YMCA 「協同」組織改革の背景には、YMCA のエキュメニカルかつ福音主義的な精神において、植民地における「支配者—被支配者」間の政治的・文化的・言語的な隔たりを超えた連帯が可能ならずだという希望的観測、⁹⁶ さらにその背後には、世界が未開から文明へ、異教からキリスト教へと進んでいくはずだという「進歩主義」的な歴史観があった。当然そこには、文化的「劣等」の「優越」に対する「同化」を無意識に肯定する差異の軽視があり、言い換えれば、ここにフィッシャーにおける「帝国意識」の片鱗が見て取れる。

しかしそのように考えるとき、「協同」の頓挫には逆に肯定的な側面があることが見えてくる。台日信徒の分裂は、キリスト教徒間における異文化交流の「失敗」であると同時に、キリスト教が「越境性」すなわち「普遍性」を有しつつ、個々の文化へ「翻訳可能」な宗教であることの証しでもある。⁹⁷ 本稿のケースに即していえば、YMCA のエキュメニズムは、その発祥地である英国本土や欧米への文化的政治的同化や従属によって広まったのではなく、正反対に個々の国家的・文化的・民族的主体の中に「翻訳」されるというかたちで広まった。その結果として、同じく YMCA の精神に共鳴しながらも、日本人とは言語、文化、習慣などを異にし、しかも植民地支配という力関係において「同化」の危機に常にさらされていた台湾人信徒が、CPM 宣教師の介入にもかかわらず、日本人との「協同」を拒否し、その分裂を通して自らの主体性を保った出来事だったといえる。そしてそれを可能にした要素として、ミッションによるキリスト教の「母語」「母（国）文化」への翻訳という作業の結果生み出された、台湾人信徒におけるキリスト教信仰と自らの言語文化との一体性という側面を指摘できよう。

台湾 YMCA における「協同」活動頓挫の物語の続きは、1930年代における日本人信徒主導の「内台融和」運動—すなわち台湾人の「同化」を前提とする台日信徒両者の歩み寄り—だけではない。日本人信徒から離れていった台湾人信徒主体の YMCA 運動の台湾における展開でもある。この双方の展開をキリスト教ひ

95 キリスト教徒による「内台融和」運動に関しては、高井ヘラー論文（2004）を参照。

96 たとえばフィッシャーは「台日信徒が平等で参与できる協同組織の試みは、キリスト教徒の心情にうったえるものである」と述べている（Fisher to R. P. MacKay, Mar. 4, 1918）。

97 キリスト教は聖書の諸言語への翻訳というプロセスを通して、外来宗教としてではなく土着宗教として地域文化に定着しうる、またしてきたことを論じているのが、Lamin Sanneh, *Translating the Message: The Missionary Impact on Culture* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1989) である。

いては YMCA が生み出し得たという歴史的事実に、その「越境性」と表裏一体をなす形で常に存在する「翻訳可能性」のダイナミズムがあらわれているといえよう。

注記：本稿は2008年6月に同志社大学で行われた第42回アメリカ学会年次大会における発表の一部をもとに作成したものである。発表自体は YMCA に焦点をあてたものではなかったが、岩野一郎氏が YMCA に関して質問されたことに触発されて今回のテーマ設定となった。査読の労をとっていただいた諸先生への感謝とあわせて、ここに記して謝意を表したい。